

藪うぐいす

山手樹一郎著

山手樹一郎作品集 2

藪うぐいす

光
風
社

山手樹一郎作品集②

藪うぐいす
ム

昭和三十七年一月二十日 印刷
昭和三十七年一月三十日 発行

定価 二八〇円

著者 山手樹一郎

発行者 豊島清史

印刷者 菅生定祥

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(三三)〇二三八番
振替東京五六一五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目 次

藪
う
ぐ
い
す

恋
討
手

伴

流
れ
雲

五

三

五

九

月に濡れる女

二九

やん八弁天

三四

雪の駕籠

三七

劍客八景

三二

装
幀

佐
多
芳
郎

藪
う
ぐ
い
す

夜　　船

淀から大阪へ八里、夜船が下る。

雨上りの日が暮れかけて、舳も鰻も大方客が一杯につまつた。中の間は相当の身分らしい若い侍が、さつきから買切りにしている。

洗われたような秋の月が明るかつた。

「そろそろ出すかな」

船頭が纜を解こうとしているところへ、

「おうい、今行くぞう」

野太くわめきながら、泥をはねとばして逸散に駆けつけて来た男がある。不精鬚をはやした六尺豊かな大男で、博奕打ちか、人足扱のおちぶれた奴か、いづれ荒い稼業の乱暴者らしく、腰に太い長脇差を一本ぶちこんでいた。赭ら顔、どんぐり眼、垢じみた素襦袢の胸から、熊のような胸毛が見える。

「さあお客さん、早く乗つておくれよ。今、船を出そうとしたところだ」

「あわてるねえ。すぐ乗つてやらあ」

じろりと船の中を見廻した大男は、図体の大きいわりに身軽く、いきなり中の間へ飛び移つた。

「ああ、いけねえお客さん、そこはお武家さんの借切りだ。乗合の方へ乗つて貰いたいね」

船頭が慌てて声をかけた。

「なんだと」

大男はぎろりとどんぐり眼をむいて、長脇差に反りをうたせた。

「馬鹿なことをぬかせ。旅の者が乗る船に、借切りつてことがあるか。馬鹿にするねえ。そつちが一杯だから、こつちの空いた方へ乗つたんだ。いけねえつていうのか」

こんなのり掛かりにあつてはなにをしかすかわからないので、船頭も頭からは嚙みつかない。

「なに、悪いアいわねえけれど、おいらア船賃を取つてその中のお武家さまにお貸したんだ、貸したからには、その中の間は、今夜はお武家さんのものなんだから、乗りたけりやお武家さんにじかに相談しておくんなさい」

「なにをぬかしやがる。相談もくそもあるもんか。手前たち、お武家さん、お武家さんつて、さんづけに奉つてやがるが、侍だつて同じ人間じゃねえか。二本差が怖くつて道中が出来るけえ」

傍若無人の悪態に、船頭も乗合の者も、今にも血が飛ぶのではあるまいかと息をひそめた。

が、若い侍はさつきから胴木によりかかつて、そつちを見ようとせぬ。じつと目を閉じて眠つたふりをしているのだ。

（大丈夫かな）

船頭はちよつと不安そうだったが、とに角船は岸を離れた。

「ふ、ふ、態ア見やがれ」

大男は誰にともなくほざいて ふてぶてしく草鞋を脱ぎ、ふなべり絎でぎぶざぶと泥足を洗つて、中の間の毛氈もうぜんの上に大胡坐あぐらをかいた。

「お武家、真つ平御免よ」

「――」

「折角挨拶してゐるんだ。目を覚ましたらどうだね」

不敵な不作法者は執拗しつように、わざと侍の膝を揺り動かした。相手は、小人しょうじん取るに足らずとみたか、それとも掛かりあつては面倒と思つたのか、目を開こうともしない。

「ふ、ふ、余つぽとお疲れのようだね。もつとも、うつかり目を覚まさねえほうが無事だからね。

――こりや甘そうだ。御馳走になるぜ」

大男は侍の前の菓子を手掴みにして、むしやむしや食つた。煙管きせるの雁首がんくびへ引つかけて、煙草盆を引寄せ、侍の煙草を吹かして、乱暴に吐月峰はいふきを叩いた。これ見よがしの面憎い狼藉ろうまじぶりである。

「石地藏相手じや張合いがねえな。どれ、俺も一休みするとしようか」

図に乗つた大男は、とうとうそこへどさりと仰向けになつて、熊のような足を侍の膝にのせたのである。

余りの無態に、乗合の者は、初めは大男を心憎く思わぬ者はなかつたが、どんなことをされても一向に侍が相手にならぬので、しまいには齒痒はがゆく、

（こりや本当に臆病なのだ）

輕侮けいぶの顔を見合せて、中には不快な色さえ浮かべる者があつた。

船はやがて淀から三里、枚方ひらかたに近く、――さんざん毒づいたり、嫌がらせをやつたり、一人で芝

居をしている無法者も、張合いなさに旅の疲れが出たとみえる。いつの間にか大駢おおいびきをかきはじめた。

「いい月ですね」

「十三夜が近うござんすからね」

人々はもう中の間のことは忘れて、思いおもいの世間話を始めていた。と、――

「無法者、起きよ」

どんと床を踏み鳴らす一喝に、乗合の者は驚いて顔をあげた。中の間の侍がすつくと立っているのである。――なんだ今ごろ、と思うまもなかつた。

「起きぬか、痴しれ者」

肩を蹴られて、

「な、なんだとッ」

むつくり大男が半身とび起きたところを、

「えい」

抜ちちだつた、したたか肩先深く斬り下げられて、大男は二言と立てず絶命する。

船頭も乗合の者も、あつと肝きんを冷やして、咄とつ嗟にはだれも口がきけない。

「船頭、見ての通り、堪忍なり難いゆえ無礼者をしとめた」

若い侍は刀を拭つて鞘におさめながらいつた。凜りんとして、べつに顔色一つかえていない。

「この夜船に、喧嘩で相手を斬つた者を、船にとめておかねばならぬという法があるか」

「さあ、私共つい心づきませんが」

「乗合のなかに御存知の方があるかな。拙者は構わぬと思うが、何か言い分のある方があるなら承

ろう」

人々も急には返辞ができなかつた。

「黙つているところを見ると、異存はないのだな」

「へえ、立派な無礼討ち、そんな無法な奴は御成敗が当然かと思ひます。な、皆さん」

一人がいうと、みんな同意するように頷く。

「しからば」

若い侍は鱸の方に乗つていた若党を呼び、屍骸を河の中へ棄てさせて、

「船頭、少しく思うところがあつて、ここから陸に行く。船を岸へ着けてくれ」

と、命じた。

やがて船が岸へ着くと、何をいつけられたか、若党が一人で上つて走つて行つた。それが、間もなく引返してきて、

「旦那様、お支度ができました」

と、答える。

侍は頷いて、槍持を一人残し、小者三人に荷物を持たせ、今の若党をつけて先行させた。

かれこれ半刻ちかく――。

「さて、今夜は一同に思わぬ難儀をかけてまことに申訳ない。これは拙者にとつても全く不慮の災難、悪しからず許してくれ。手間を取らせてすまなかつたな」

若い侍は慇懃に会釈をして、槍の石突を返し、ぐいと船を押出した。終始その落着いた態度と、行きとどいた挨拶に、誰も不平をいうものはなかつた。

心がけ

岡山藩で生駒小平太は物の役に立つ若者として、一藩に知られていた。それが帰国すると間もなく、だれからもれたか淀の川船事件が噂になつて、

「あの男ならやりそうなことだ」

と、聞くほどの者をはほえませた。

小平太としては、自分から奇を好んでするわけではないのだが、いつもそういう廻り合わせにぶつかつて、必死にもがき抜けて行くことが、人にはなにか一風変つてみえるらしいのだ。

先年江戸勤番中、主君池田光政の行列へ、旗本某が馬を突つかけようとした事がある。事實は初めから突つかける気ではなかつたらしく、行列が本石町を日本橋のほうへ通行中、両国のほうから駆けさせて、急に乗馬を止めえず、——当時はまだ、大名と旗本との間に始終意地ずくの喧嘩の絶えなかつた時代だ。馬が止まらないので構うものかと意地になつたらしい、そのまま行列を乗りきろうとした。

「危ない」

すでに光政の駕籠がほど近かつたので、行列は騒然となつたが、誰も咄嗟にうろたえ気味で駕籠を護ろうとするばかり、馬を止めようと気のついた者はない。その中からただ一人、小平太が走り出て、ばつと轡くちかへしがみついた。

武道の達人という柄ではないから、法にかなつて、見事取り押えるというわけにはいかなかつた。ただ身を棄て、轡にしがみついたというだけである。

「無礼者、なにをするつ」

意地ずくの旗本は気が立つているので、鞭をあげて発止はつしと小平太を打った。

「お馬が荒れているようでございますから、おしずめまいらせませす」

打たれながら、小平太は必死に怒鳴った。怒鳴りながら二三間引摺られた。それでもどうにか食い止めたが、なんと勘違いしたか旗本の若党共が、いきなり抜刀してかかろうとする。これは気のついた味方が数人駆けつけて、抜刀させずに取押えた。

「ええ、無礼者、放せ。放せ」

旗本はなおも、いや、若党が押えられて一層いきりたつたのかもしれない、つづけざまに三つ四つ鞭を鳴らしたが、小平太が黙って打たれているので、さすがにそう乱暴もつづけかねたらしい。

「おのれ、なにゆえ通行の邪魔をする。無礼であらう」
打つのを止めて威丈高いだけだかにわめいた。

「いいえ、お馬の気を鎮めておりますので」

「いうな、しからばなにゆえ家来共まで手籠てごにするのだ」

「御家来は手前を狼藉者と見誤りましたか、抜刀しようとしたので、朋輩共が宥なだめておりますので、決して他意があつたものではございません。御覽の通り主人光政もまかり通りました上は、何卒御通り下さいますよう、——方々、お退りめされ」

小平太はさつと身を退いて前に跪ひざまずいた。一同これに倣ならつたので、旗本は睨みつけながら、無事にそのまま行き過ぎた。

「小平太見事であつた」

邸へ歸つてから、光政は小平太を呼んでそのあつかいを賞した。

「しかし、痛かつたであらうな。大事にいたせよ」

無^む慚^{ざん}な鞭の跡が痛々しかつたのである。

小平太は面目をほどこしたが、轡にしがみついた恰好が余りよくなかつた。それに、後から打たれた分は、馬の蔭へ避ければいくらもよけられたのである。

「あれが、刀だつたら斬られているところだ。大体、腕に自信もないのに、飛び出すのが間違いのだ」

中にはその不手際を詰^なめる者もあつた。

「いや、あの場合は先方が気が立つているので、わざと黙つて殴られていたのだろう。よければ一層相手が激するからな。身を以つて主人を護る、手際不手際の問題ではない」

うがつた弁明をしてくれる者もあつた。

小平太は別に言訳のようなことも、抗議めいた言葉も口にしなかつた。

その小平太が、翌年の春、国許でまた問題を起した。

一日、近習仲間五六人と、酒肴の用意をして城外の桜山へ花見に行つたことがある。咲きも残らぬ見ごろの桜花で、城下の老若男女が思いおもいの場所へ陣取り、或いは幕をめぐらし、毛氈をして、賑やかに遊び戯れていた。

「おい、岡山小町のお通りだぞ」

ふいに一人がおどけて叫んだ。

見ると、小平太達の毛氈からだらだらと見下せる小^こ徑^{みち}を、十七八歳の勝^{すぐ}れて美しい娘^{むすめ}が老婢^{らうひ}をつ